

## 第3章

# 地球市民学

## 多文化コミュニケーション学

地球市民学 前期

藤田 高弘・中野 和之  
佐光 美穂・山田 肖子\*

【抄録】 言語文化・宗教文化・生活文化と3つの分野から文化の学習を進めた。3グループ合同の授業では、多文化の基礎的学習内容を共有し、各文化の同質性と異質性を理解する。また、留学生との交流会を通して、コミュニケーションの取り方や在り方を考えさせ、異なる文化に対する感性と多様な文化形態を受容する寛容な思考を高める。その上に立って、科学的分析力・思考力を応用した地球市民としての倫理観を身につける。

【キーワード】 言語表現 宗教文化 生活文化 留学生 交流会 コミュニケーション 異質性 同質性 地球市民

### 1. 目 標

- (1) コミュニケーションの意味を知識と体験を通して見つけ直し再認識する。
- (2) 自国文化を再認識しながら、世界の多様な文化の存在に気づき (Awareness)、異なる文化に対する感性 (Sensitivity) を高める。
- (3) 文化や文明間に存在する諸問題に対して柔軟に行動 (Action) できる力を養う。

カリキュラムの編成方針として、縦軸に、生活文化、言語文化、宗教文化を設定し、横軸に、日本、欧米、アジア、アフリカを置きながら、各文化の共通性と異質性を理解、体験し多文化コミュニケーションの重要性や必要性に気づき、異なる文化に対する感性と寛容性を高めることを目標にした。

### 2. 学習方法

高校2年生を対象に1クラス40名を3つのグループ(生活文化・宗教文化・言語文化)に分け、それぞれのグループを3人の教師(国語・社会・英語)が担当して生活・言語・宗教についての授業を少人数で展開した。但し、3つのグループがそれぞれ単独で授業をするだけでなく、3グループ合同の授業を3回行い、学び合いの場面をつくり、他グループとの知識の共有を進めた。

今年度は、次の2点を重点目標とした。

- (1) 各3つのグループの単独授業を増やし、科学的探究力(解釈・分析・推論・批評)や論理的・多元的・批判的思考力を高めたり、地球市民としての価値・態度を身につけさせたりする授業内容を工夫する。
- (2) 体験的な活動を取り入れ、文化理解を深めたり、多文化コミュニケーションの意義や必要性にせまるようにする。

### 3. 実践内容

(1) 「地球市民学」前期：多文化コミュニケーション学 2008年度授業計画

回	生活文化グループ	宗教文化グループ	言語文化グループ
1	オリエンテーション グループの説明10分	オリエンテーション グループの説明10分	オリエンテーション グループの説明10分
2	特別授業1 多文化コミュニケーション合同ワークショップ (3グループ合同) *多文化社会をサバイブする (山田先生)		
3	旅するデザイン 文様のルーツを探れ!	キリスト教の成立 ギリシア哲学との交わり	ことばの不思議 —ことばに驚く!—
4	日本と中国の文様 文化交流の歴史を読み解け!	キリスト教の発展 中世スコラ学と近世哲学	英語と日本語を比べる —言葉の仕組みとコミュニケーションスタイル—

\*名古屋大学大学院国際開発研究科准教授

回	生活文化グループ	宗教文化グループ	言語文化グループ
5	変わる文様の形と意味 ケルトの渦巻、イスラムの縞	ケルトの世界 キリスト教以前	ケルトの言語 —ゲール語を知る—
6	様々な衣服 世界の衣服を分類せよ!	タブーと信仰 イスラム教の世界	ケルトの名残り —U K 言語の多様性—
7	浴衣を着てみよう	バラモン教の神秘 古代インドの世界	物語のことはば —ケルト的文学—
8	衣服と身体動作 浴衣を着て動け!	密教声明の比較 仏教を感覚で捉える	世界の英語を歩く —World Englishes—
9	洋服のグローバル化と 日本人の身体	現世利益 現代日本の宗教と社会	消滅する言語 —少数言語にどのように向き合うか—
10	特別授業2 多文化コミュニケーション合同ワークショップ (3グループ合同) *アフリカの生活・宗教・言語文化を知る (山田先生)		
11	まとめ +夏休み探求課題の説明	まとめ +夏休み探求課題の説明	ことばシリーズのまとめ +夏休み探求課題の説明
12	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備 ①	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備 ①	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備 ①
13	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備 ②	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備 ②	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備 ②
14	発信型多文化コミュニケーション合同学習 (留学生とともに) 「価値観の異なる人々とのコミュニケーション力を磨く」(3グループ合同)		
15	振り返りと総括・アンケート		

## (2) 授業の実際

### 1) 生活文化

#### ① 授業内容例

衣食住を中心とする日常生活は、私たちの価値観の土台となっているが、それゆえに自らは意識しづらい。本コースでは、特に衣生活を具体的な題材として取り上げ、体験型の学習を通して自文化を意識するきっかけとすることを意図した。

授業実践の例として、「旅するデザイン——文様のルーツを探れ!」を取り上げる。本授業はコースの導入の授業であり、中国、インド、アラビア半島、フランスなどの国や地域の文様だけを提示し、どの文化圏のものかを生徒に考察させた。文様の中にそれぞれの文化や歴史の独自性が刻まれていることが確認され、文化の多様性を視覚的に理解させることにつなげた。この授業では授業時間の制約から通時的な側面は取り扱えないため、次時「日本と中国の文様——文化交流の歴史を読み解け!」と取り合わせて、一地域の文化も、異文化接触などの要因で変化していることを示した。

### 2) 宗教文化

#### ① 授業内容例

世界の多様文化の基底には、人々の信仰する宗教が、生活・文化・思想などに大きく影響を与えている。たとえば、ヨーロッパ世界ではキリスト教が、中近東地域からアフリカ、東南アジアにかけてはイスラム教が、東アジア世界では仏教が、それぞれ根付き、それにともなった多様な文化を構築している。各文化を理解するための前提として、これらの宗教の有り様を考えることは多文化理解の基となる。

基本的には、各宗教の概要が理解できていないので、「倫理」学習で取り上げる内容を学習した。ただ、座学にならないように、各宗教音楽や映像を通して体感できるように工夫を行った。身体を使っての学習活動として、簡易的な「坐禅」を取り入れてみたりした。

#### ② 宗教文化意識調査の結果

宗教グループと全体との数値差は顕著には表れなかった。事前・事後調査共に、平均0.1~0.2の差であった。ただ、学習内容に関するアンケート調査で

は、「多文化コミュニケーション学」の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事柄への関心が高くなると思う」という項目で0.5数値が低かった。宗教に関する学習などの座学が中心となっていたため、他のグループとの数値差が出たものと考えられる。同じように「少人数で学習したために疑似体験など多様な学習活動が出来た」という項目でも0.4数値が全体より低かった。如何に体感的な学習を導入していくのかということも今後の課題として浮かび上がってくる。

事前・事後アンケートでは、宗教グループを含めて、全体的に事後アンケート結果の数値の方が高かった。特に、宗教グループでは、「コミュニケーション力がある」という項目が、0.6と高く、さらに「世界の多様な文化を持つ人々とのコミュニケーションすることができる」項目が0.5ポイント高かった。特に、「コミュニケーション力がある」項目に関しては、全体より0.2ポイント高い数値が出ている。これは、受身型の座学ではなく、自分の意見を交えて考える形式の学習方法を取り入れた結果であると考えられる。

「坐禅の体験が最も印象的だった。普段、無音状態のようなものを体験したことがなかったので、貴重な非日常の宗教体験ができたように思う」（男子）。「授業で簡易な坐禅体験をしたこと、思ったよりもリラックスすることができてよかった。また、夏休みの課題でも坐禅を取り上げてレポートを書いたので、自分はだいぶ詳しくなったと思う」（女子）。

特に、生徒にとっては「坐禅」体験が上記のような感想からも分かるように、強く印象に残ったようである。夏休みの課題に、「坐禅」を選ぶ女子生徒もあり、授業における体感という要素が如何に大きいのか伺える。この実践にとって重要な役割を持つのは、この「夏休みの課題」である。生徒は、様々なテーマで課題追求をまとめてきた。例えば、「キリスト教」から「イスラム教」さらには「日本の新興宗教」、「密教」、「自分の家の宗教」など、学習した内容を深めようとしたり、自分の身近にあるものに題材を求めたりと、多様な学習活動を支えている要因となっている。

今後とも、体感できる教材や教材内容を深めていく座学、さらに、学校で学習してきた内容を自分なりに応用していく課題研究の相互の連関を深めていくことが必要であろうと思われる。

### 3) 言語文化

#### ① 授業内容例

普段使用している「ことば」の機能、役割に驚き不思議に感じることから始め、日本語と英語を比較しな

がら、ことばの仕組みやコミュニケーションスタイルの違いに気づき、さらに世界の多言語の現状理解や、少数言語にどのように向き合うかを考えさせ、言語と文化の関係について興味・関心や、理解が深まることを中心となるように授業実践をした。

具体的な授業実践例として「多文化理解としてのケルト」では、西欧文化の基層をなすケルトの言語、文化、文学に触れ、ギリシャ・ローマ文化との関連性や、日本文化との共通性・異質性について理解を深めたり、世界の多様な文化に対する興味・関心を高め多文化理解への第一歩とし、さらに英語のグローバル化の中でイギリス、アイルランドの中でケルト語派のような少数言語、消滅する言語にどのように向き合うかを考えさせた。

#### ② 言語文化意識調査の結果

言語文化グループの生徒の自由記述（事後アンケート）から、言語文化に関する意識の変化で以下のような特色があきらかになった。最初に、「言語文化に対する多様性」の気づきに関する記述がみられることである。日常的に教科として学習する英語を客観的に見つめなおす機会となったり、世界の中での英語の役割や、言語と文化の根本的な課題を考え、問題の深さを理解している記述が見られた。

##### 自由記述より引用：

「英語の多様性について興味を持ちました。僕が普段学校で習う英語とは違う性格を持った英語が見れた。・・・英語そのもの、存在の意味、どういう位置に属するのかなど、本質的な部分を学べた。」  
「・・・言語が文化に影響を与え、また文化も言語に影響を与えている。そのため、言語の統一や消滅・多様性の問題はとても複雑なものに感じた・・・」

次に、「異なる言語文化への体験的活動」による興味・関心の深まりや、感性の高まりについての記述が量的にも多く、質的な変化としても見られることである。当然のこととして意識しない日本の言葉や文化的な慣習が、留学生や異文化の人に驚きであったり、受け入れがたいものであることを再認識したり、世界の言語文化の広さ感じたという記述をしている。

##### 自由記述より引用：

「・・・3人の留学生が同じ地球上にいるのに全く違う言葉で話しているから、日本人には普通に思っていることでも外人がみると変だと思えることに気付かされた・・・」  
「・・・留学生のお話を聞いて、大げさに言うと、世界の広さを感じた。世界にはほんとに多くの文化が

あって面白いなあと思った。また、小さな範囲で物事を考えるのではなく、大きな視野を持って物事を見て、考えるようになったと思う。」

#### 4. 成果と課題

##### (1)事前・事後アンケートの結果より

授業開始日2008.4.18と授業最終日2008.9.26にアンケートを実施した。

事前と事後の意識調査の変化から最も顕著なことは、「世界の多様な文化を受け入れることができる」という項目で高いレベル（5：とてもそう思う、4：そう思う）のパーセントが増加したことである。このアンケート項目の高いレベルがPRE：49.6%からPOST：75.7へと変化した。事前の調査ではどちらでもないという中間層からの移動が見られた。半年間のプログラムを通して、多様な文化を受け入れる態度を育むことができる程度でき、実際に行動（Action）へとつながる準備ができたと考えることもできるが、現実的に異質な文化や価値を受け入れることの難しさにまで考えが及んでいないのかもしれないとも推察できる。

次に、「世界の多様な文化を持つ人々とコミュニケーションすることができる」の項目で高いレベルのパーセントが、PRE：17.7%からPOST：46.1%へと変化した。異文化を体験する活動を導入したり、映像や具体的な資料を活用し擬似的な異文化体験をすることによって、多様な文化を持つ人々とコミュニケーションするという積極的な態度や自信をある程度育むことができたのかもしれない。しかし、多様な文化を持つ人々とコミュニケーションのについての知識や観念的な理解にとどまり、現実的な行動への道りは遠く、コミュニケーションスキルの訓練や習得の必要性までは考えていないという可能性もある。

##### アンケート項目

##### 1) コミュニケーションを自らとろうと思う。

- 1：そう思わない
- 2：あまりそう思わない
- 3：どちらでもない
- 4：そう思う
- 5：とてもそう思う

##### PRE

GRADE	FREQ	%	
1	3	2.7%	
2	20	17.7%	20.4%
3	23	20.4%	
4	56	49.6%	
5	11	9.7%	59.3%
SUM	113	100.0%	

##### POST

GRADE	FREQ	%	
1	1	1.0%	
2	10	9.8%	10.8%
3	19	18.6%	
4	55	53.9%	
5	17	16.7%	70.6%
SUM	102	100.0%	

##### 2) コミュニケーション力があると思う。

GRADE	FREQ	%	
1	16	14.2%	
2	37	32.7%	46.9%
3	45	39.8%	
4	14	12.4%	
5	1	0.9%	13.3%
SUM	113	100.0%	

GRADE	FREQ	%	
1	6	5.9%	
2	37	36.3%	42.2%
3	33	32.4%	
4	23	22.5%	
5	3	2.9%	25.5%
SUM	102	100.0%	

##### 3) 世界に多様な文化があることは大切である。

GRADE	FREQ	%	
1	1	0.9%	
2	0	0.0%	0.9%
3	3	2.7%	
4	52	46.0%	
5	57	50.4%	96.5%
SUM	113	100.0%	

GRADE	FREQ	%	
1	0	0.0%	
2	0	0.0%	0.0%
3	3	2.9%	
4	39	38.2%	
5	60	58.8%	97.1%
SUM	102	100.0%	



## 4) 世界の多様な文化を受け入れることができる。

GRADE	FREQ	%	
1	1	0.9%	
2	10	8.8%	9.7%
3	46	40.7%	
4	45	39.8%	
5	11	9.7%	49.6%
SUM	113	100.0%	

GRADE	FREQ	%	
1	1	1.0%	
2	5	4.9%	5.9%
3	19	18.6%	
4	61	59.8%	
5	16	15.7%	75.5%
SUM	102	100.0%	

## 5) 世界の多様な文化を持つ人々とコミュニケーションすることができる。

GRADE	FREQ	%	
1	6	5.3%	
2	41	36.3%	41.6%
3	46	40.7%	
4	18	15.9%	
5	2	1.8%	17.7%
SUM	112	100.0%	

GRADE	FREQ	%	
1	2	2.0%	
2	23	22.5%	24.5%
3	30	29.4%	
4	43	42.2%	
5	4	3.9%	46.1%
SUM	102	100.0%	

## (2)多文化コミュニケーション学に関するアンケート調査より

授業最終日2008.9.26にアンケートを実施した。

## 1) 思考力・科学的探求力の意識調査より

思考力、科学的探究力（データの分析・推論・批評）に関しては、事後の意識調査で次のような結果となった。「多文化コミュニケーション学で学習した課題について自分の意見を持つようにしている」というアンケート項目の全体の平均値は、3.7（最高値5.0、最低値1.0）である。このことから、学んだ内容を自分の生活環境や身近な課題と関連づけて考えているという意識はかなり高いと言える。次に、「多文化コミュニケーション

ン学で学習した知識を活用して自分の考えを持つようにしている」という項目の平均値は、3.4である。これは、学習した知識を利用したり、活用したりする態度や意識を持っていると考えられる。また、「3つのグループの視点から多角的に1つのテーマを考えることができる」という項目の平均は、3.7である。このことは、多文化コミュニケーションの意味を異なる3つの観点、すなわち生活文化、宗教文化、言語文化という多角的な視点から考えることができたとかなり高く認識していると推論ができる。さらに、「与えられた課題を深く分析し、まとめたりする力を持つ」という項目の平均値は、3.5である。このことから、与えられた課題を分析したりまとめたりする力をこの授業を通して養うことができた意識していると考えられる。

## 2) 「多文化コミュニケーション」に対する深まり

事前と事後アンケートの自由記述で、「多文化コミュニケーションについてのあなたの考え」をまとめさせたが、事前の段階では、大切なこととは感じつつも概念的で具体性のない記述が少なくなかった。しかし、事後は、多文化コミュニケーションの難しさや必要性に関する実感を伴った記述が見られ、記述の多くに「受け入れる」というキーワードが目につき、生徒が自分に差し迫った問題としてとらえていた。

## (3)今後の課題

多文化コミュニケーションの事前・事後調査から、世界に多くの文化が存在すること、すなわち文化の多様性に対する価値の重要性についてはすでに理解しているという前提でシラバスを作らなければならない。その認識に揺さぶりをかけたり、実践的なコミュニケーションの場を作り、擬似的な摩擦や紛争状態を体験させ多文化の現実を感じさせたり、考えさせたりすることが課題としてある。

異文化理解や共生のための感性は多文化コミュニケーションの授業にも対応できるものではあるが、多文化を意味する様々な価値観との共生までにはいたっていない。地球市民学の後期にある「共生と平和の科学」で扱う現代の諸問題「ジェンダー」・「子どもの人権」・「紛争」等の学習への土台作りを、我々の身近なところにある「性差」・「世代差」や「教育」・「環境」・「経済」格差が生み出す様々な価値観との共生を図ることができるコミュニケーション力を育成する教育課程を検討していく必要がある。